
けいおん！ 運命と奇跡の交錯

Neil^Dylandy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 運命と奇跡の交錯

【Nコード】

N6889V

【作者名】

Neil^Dylandy

【あらすじ】

とある高校、私立桜ヶ丘女子高等学校に入学した一人の彼女は今まで、何もしていなかった。

一つの出会い、仲間との出会い。これは偶然。そして自分が仲間と離れ離れに、これが必然。

元気な彼女達が奏でる涙と愛と非情の演奏の詠唱の旋律。

いくら強がっても現実には勝てない。そう、運命を切り裂く事は不可能だ。

運命と奇跡が交差する時、平沢唯の進化が問われる物語が始まる！
！！ 更新一時停止。メイン小説完結まで更新ほぼ不可状態。

prologue

青く雲一つない澄んだ空を今日も彼女達は同じ空の下で見る。
だがそれはそうも長くは続かない。

その同じ空の下の町で生活している一人の姉と一人の妹は避けられない絶対的な運命と遭遇する。

だがそれはまだ先の事である。

彼女達は卒業まで皆と演奏し、皆と笑い、皆と合宿したり、皆とお茶してずっと楽しい当たり前の日常が続くはずだった。

だがそれが引き裂かれる運命に立ってしまったということは彼女達はまだ知らない。

だが引き裂かれる運命に立たされたとしても彼女達の淡い思い出は一生の宝物だ。

別れを知らされた二人は今後どんな影響をもたらすのか――

そして一人を、大切な友を失った彼女たちにどんなきっかけが訪れるのか――

この学校に入学した一人の少女は一つのきっかけにより大きな人生の変化と自分の大きな成長をもたらした。だがそれは偶然が偶然を呼んでさらにまた一つの偶然を呼びそして一つの奇跡を生んだ。

そこから彼女の人生が変わったのである。

出会いは偶然、別れは必然。そんな偶然が絡みこんだ世界で彼女たちはまた学校へ行き楽しい学校生活を過ごそうとしていた。

そう、彼女達がいなくなってしまうことしらずに――

#1 当たり前の日常

八月下旬、季節は夏。私立桜ヶ丘女子高等学校は夏休みを終えて二期を迎えていた。

さんさんと照りつける太陽の下、彼女たちは再び学校へ登校し学校生活を送ろうとしていたのであった。

「皆、おはよ〜」

一人の少女が私立桜ヶ丘女子高等学校、2年2組の教室の扉を開けてギターのケースを背負って挨拶して入ってきた。

「お、唯だ。おはよ〜」

一人の少女が唯と呼ばれる少女に挨拶を返した。

その挨拶をして入ってきた少女は平沢唯という短い髪を揃えた茶髪の少女だ。

この少女は基本、ゆったりで天然の少女だ。軽音部所属、担当はリードギター&ボーカルである。一つの事を覚えれば一つの事を忘れてしまう事が多かった。

だが彼女の集中力は尋常じゃなかった。一つの事に熱中すればとんでもないとこまでいく。過去に川にいるザリガニを風呂場一杯に集めたというある意味すごい記録をもっていたりする。

そして絶対音感。だが専門用語は全く知らないがチューナーを使わずとも弦の音の調整をしてしまうすごいんだか、すごくないんだかよくわからない少女だった。ちなみに彼女は食べても太らない体質

らしい。

そして挨拶を返してきた少女は田井中律という頭にヘアバンドをとりつけておでこを丸出しにしている少女だ。

髪はショートヘアーで栗色の髪色だった。ボーイッシュな風貌と言葉遣いが特徴的だ。部活は軽音部で担当はドラムだ。

性格はちまちましたのが嫌いな性格でギターなどちまちまとした指使いが嫌だった。そして何かとそっちへと優先させてしまう性格である、だが人の気遣いがうまく彼女の親友に思いやるが多く、他人の事を思いやる優しい少女だった。こう見えても軽音部の部長だったりする。

「りっちゃん、おはよ〜」

「唯、今日も眠そうだな」

律は机に腰かけて笑った。

「昨日、ギターの練習してたんだ。気づいたらこんな時間になって・・」

唯はそういい、大きなあくびをする。

「おいおい、女子なんだからあくびとか抑えようぜ・・」

「え？別にいいじゃん」

唯は周りの視線とか気にしないタイプなので思いきりあくびをやっ

ていた。

律は唯の場に応じた行動をしないことに苦笑いしていた。

「あら、唯ちゃん、りっちゃん、おはよう」

一人の少女が話に入ってきた。

「お、むぎちゃん。おはよう」

「むぎちゃん、おはよう」

朝の会話に入ってきたのは琴吹紬という少女だ。

彼女の特徴、まずは綺麗で癖のない金色の髪をした長髪と少し太い眉毛が特徴だ。

彼女も軽音部所属。担当はキーボードである。

彼女はおっとりぽわぽわ、天然な性格で唯と若干似ている部分がある。彼女の家は豪邸で、家からお菓子だり高級なティーセットなどを持ってくるのだ。そして、女性同士の話し合いに凄い意識を持つてしまうことがあった。

「今日は間に合ったみたいね」
紬は唯にそういった。

「むぎちゃん失礼な！私は普通に毎日、余裕に間に合っているよ！」

唯が遅刻しなかったことをでっちあげた。

「普通に毎日余裕に間に合っているんじゃない、間に合うか、間に合わないかのギリギリの毎日だろ?」

律は唯の言った言葉を訂正させた。

唯と律の感覚はどちらも違うようだ。

唯からしては時間ギリギリ〓余裕もしくは遅刻してないからそれでいいというのだろ。

律は時間ギリギリ〓遅刻するという感覚だ。

「そう?」

「そうだぜ」

「遅刻しないだけでいいじゃない」

紬はニツコリ笑顔で返答する。

唯の言った言葉に律は即答した。

「さっ、先生も来るから早く席につきましょ」

「うん」

「そだな」

そついい唯と律と紬はそれぞれの席に向かった。

そして先生が来ていつも通りの学校生活が始まった。

一方、同学年で同じ軽音部所属の少女と平沢唯の幼なじみがいるクラスでは――

「和、おはよう」

「澪もおはよう」

一人の少女が和と言い、挨拶を返した和が澪と言った。

真鍋和、彼女はかなり短い茶色の髪に赤い眼鏡が印象的だ。彼女は平沢唯と幼稚園時代からずっと一緒でずっと同じクラスだったが今年で別クラスになってしまった。幼なじみだから、お互いがお互いを理解していると回りから思われている。だが二人のギクシャクした関係さに律から「お前ら、本当に幼なじみか？」と言われる程である。けど唯の事をしっかりみているなど面倒見のいい少女である。

そしてもう一人の名は秋山澪という少女だ。まず目にいくのが黒の艶やかな癖のない黒い長髪と大きい身長が特徴だ。彼女も軽音部所属。担当はベース&ボーカルである。性格は沈着冷静で落ち着いているが沢山の人の前に出たりすると、情緒不安定になってしまう少女である。だが窮地に追い込まれば気絶するほどの火事場力を見せる。この少女も真鍋和と同じで面倒見がよく、色んな人を面倒見ている。そして極度の怖がりである。昨年に澪は前代未聞の不幸な事故をお越し、それ以来、裏には澪ちゃんファンクラブまでできるほどである。

「夏休み、早かったわね」

「ええ。日が立つのって早いわね」

「所で漑、夏休みの課題は全部やったわよね？」

突然、和が課題について聞いてきた。

「勿論やったよ」

「さすが漑ね。私もやったけど唯がちゃんと全部やったか・・・」

この言葉を聞いた漑は一番の親友、律が浮かんできた。

「律も全部やったか心配・・・」二人は心配で溜息をついてしまった。

その後、先生が教室に入ってきて「HR始めるから席に着きなさい」と言った。

「じゃ、またあとで」

「うん」

そしてそれぞれのクラスにいるそれぞれの生徒が2学期の生活を迎えた。

始業式、HR、掃除を終えて放課後――

今日は午前で終了の為、唯と律にとって苦痛である授業はなかった。

ちなみに彼女、澪と和が心配していた宿題だが珍しく・・・というより夏休みの二日、三日前に急ピッチで仕上げたのだが・・・きつと彼女たちの事だ。回答ミスなどきつとたくさんあるだろう。

「いよっしゃ！部室行ってお茶にするぞ！行くぞ！唯！むぎ！」

「お供するでやんせ！りっちゃん！」

「は～～い」

何故か唯は敬礼しながらいった。彼女の天然さがもろに表に出ていた。

そういい、三人は部室に向かった。

三人が部室に向かっている一方、一個下の学年の平沢唯の妹、平沢憂とその仲間がいるクラスでは――

「始業式は早く終わっていいね～～」

一人の少女がそう言った。

「始業式の日が終わると二学期が開始か～～って思うよね、純ちゃん」

「憂、ここから私にとっては嫌な日々が始まる・・・」

一人の少女は純と言った。

鈴木純、彼女は平沢唯たちの一個下の学年だ。この少女も律と同じでボーイッシュ的な雰囲気を出している。茶色い髪は後ろに短く二つに分けている。雨が降った日のこの少女の髪のバサつきは筋金いりだ。かつて直すのに1時間もかかったとか、かからなかったとか。ちなみに部活は軽音部ではなくジャズ研究部に所属している。

もう一人の少女は平沢憂という。

この少女は名字の通り、唯の妹である。後ろに短く束ねた茶色い髪。健気な性格で見た目も清楚可憐で料理も運動もできる。何もしてない姉とは大違いの妹だ。かつて律に「妹さんにいいところ全部すいとられたんじゃないか？」とか「遊び人の姉と働き者の妹。不幸のドラマが始まるケースだ」と言われるほどである。周りからは姉妹なのに違いすぎると思われる。だが憂は姉に対する信頼は非常に深い。過去に平沢家でクリスマス会を行った時に唯と憂のプレゼントが姉妹にわたってしまい、唯にはなくした片手の手袋を憂から送られを。憂にはマフラーが唯から送られた。二人の信頼はこれを見てかなり深いと周りからはそう見られている。

「今日は早く終わったから、軽音部の練習できるかも・・・」

「梓ちゃん、練習頑張つてね!!」

梓と呼んだ憂。

名前は中野梓。小さな身長と長い紺色の艶やかなツインテールがか

なりの印象的だ。彼女が唯一、一年での軽音部の部員だ。担当はサイドギターである。かなりの真面目者で入部当初、軽音部の空気についていけず唯たちを叱咤したことがある。軽音部でのマスコットキャラ的存在。唯や律たちから、からかわれたりある人から猫耳をつけられたりなど彼女からしては悲惨な出来事ばかりだ。猫耳を装着し、猫の鳴き声の真似をしたら気に入られ唯にあずにやんとつけられてしまった。

憂が応援する。

「先輩たち、いつもお茶ばかりであんまり練習しないんだよね・
・今日は早く終わったし練習したいな・・。学園祭のライブもあるし・・」

「そこはファイトだよ梓。じゃあ私は先に部活行ってるね」

「じゃあね〜」

そついい純は教室から出た。

「じゃあ、私も部室に行くかな。また明日ね、憂」

「また明日ね梓ちゃん」

そついい、梓は歩き長いツインテールをなびかせながら教室を出た。

軽音部5人がそれぞれ同じ部室へと向かう。

これから彼女達の活動が再び始まる。

#1 当たり前の日常（後書き）

1話が終了致しました。

どうも、けいおんの二次作品を読んで自分も書いてみようかな・
・と思ったNeilhandyです。

読んでくれましたか？・・・ってまだ二話しかないですね（笑）

作者はまだまだ圧倒的未熟者です。

文章に誤字脱字があると思います。その時は指摘してくれたら嬉しいです。

さて、これから僕が執筆していく小説、けいおん！ 運命と奇跡の
交錯。

まず、アニメとは違うストーリーβ版を展開。

最初は第一期の唯達が2年生、2学期開始の所からオリジナルストーリーを展開。

アニメの一期は二期とは違い学祭まですっ飛ばしが多かったんで、
そこに着目して書いていきます。

学祭は11月後半の設定。

そこから純粹のオリジナルストーリーを書いていきます。なるべく

世界観を広く書くように頑張ってくださいですのでよろしくお願いします。

#2 全員集合！

「でしょー」

「そうなのー？」

四人の少女の笑い声が音楽室から扉越しにかすかに聞こえる。

「皆さん、お疲れ様です！」

一人の小さい少女が音楽室の扉を開けて中へと入ってきた。音楽室に入ってきたのは梓だった。

「よー梓。先にお茶してるぜ」

律がそう言った。

机が四つ向かいあわせに並べられ、椅子には唯と律と紬と澪が座っていた。

「あゝゝ、あずにゃんだ！！」

その声をあげたのは梓のあだ名の名付け親、唯だった。

唯は椅子から立ち上がり、足音をドタドタあげながら梓に抱き着いてきた。

「二学期始まったね、そしてもう離さないぞゝゝ」

唯は梓に抱き着き自分の顔で梓の顔にすりすりする。

「もう！やめてください！唯先輩！」

梓は恥ずかしかったのか、無理矢理、唯の抱擁から離れた。

「もう〜あずにゃんったら恥ずかしいのかな？」

「当たり前です！」

その唯と梓のスキンシップのやり取りを見ていた律と紬と漑は苦笑いしていた。

「さっ、梓ちゃん座って。今日はケーキよ」

紬はそういい高級感漂うティーセットのカップにお茶を注ぎ、皿の上にショートケーキとフォークを添えて梓に渡した。

「ありがとうございます、では」

梓はショートケーキを食べ始めた。

「ところで唯に律、二人とも宿題ちゃんとやったか？」

漑が一番心配していた「宿題」という課題を二人はちゃんとやっているか問いかける。

「もちの!」

「ろん！ですよ！」

何故か唯と律が言葉を分けて言った。打ち合わせもしていないのにこんなやり方ができるなんて凄いと梓はケーキを食べながらそう思っていた。

「この通り！！」

「ちゃんと！！」

「「やりました！！！！」」

「「アゝッハッハッハ！！！！」」

最初は律、次に唯と再びセリフを分けて言った。

最終的に二人一緒に言い、唯と律は勝ち誇ったように宿題を片手に出しながらあさつての方向を向き笑い始めた。

「どれどれ？・・・」

漣は二人の宿題の内容を見る。

「・・・やったのはいいが間違い多いぞ・・・二人とも・・・」

漣は苦虫を噛んだような顔で言う。よっぽど間違いが多いが、想定外な解答が多いのだろう。

「嘘だ！間違いがあるのはりっちゃんの宿題だよ！私の宿題に間違

いはないよ！澪ちゃんきつと、りっちゃんの二回見たんだよ！」

（おいっ！何いってんのこの子！お前も十分間違い多いだろ！！）

律は唯の発した言葉にツツコミを心の中で入れた。

「唯も律と同じくらいの解答ミスが多いぞ・・・」

「ええ~~~~」

唯はそういい、机の上に悶絶した。

「唯ちゃん、ケーキまだあまってるからこれ食べる？」

紬は紙のケースからケーキを一切れ出した。

「喜んで食べます！！！！」

唯はまるで小さい子供のように目をキラキラと輝かせながら即答した。

「立ち直り早っ！」

澪はツツコミをいれた。

「食べ物的事になると唯先輩、活発ですよね」

「現金なやつだよなー」

梓と律はそういい、笑顔でケーキを食べる唯の顔を見て笑っていた。

「みんな、お疲れ様〜」

一人の女性が突如、音楽室に入ってきた。

「あ、さわちゃん、お疲れ〜」

「さわ子先生お疲れ様です」

その後も三者三様の挨拶を交わした。

この美しい若い女性の名前は山中さわ子という女性である。見た目からして年は20代前半だろう。後ろに伸ばしている長い茶色の長髪と眼鏡が印象的だ。彼女はここの卒業生で部活は軽音部だった。現在はここの学校の先生と軽音部担当をしている。過去にワイルドになるために努力したがやりすぎてそれが逆効果となってしまう、男にふられたことがある。彼女は多重人格者、ギターを持つと性格と目つきが変わり眼鏡を取ってかなりのハイテンションでギターを弾く。ちなみに得意技は歯ギターである。趣味は自分の作った衣装を唯たちに着させることである。だが実際のところ、作った衣装が気に入られてるのが唯と紬だけである。

「今日はケーキか、いいわね〜」

さわ子は紬がお茶の用意をしている様子を見ながら言った。

「どうぞ召し上がりください、先生」

「ありがとね」

さわ子は上品に食べ始めた。

「ところで今年の学祭の衣装どうする？」

「気が早いぜ先生……。まだ二学期始まったばかりだろ……………」

「善は急げ、だよりっちゃん」

「まあそうだけど……………」

「今年の衣装も期待してるよ、さわちゃん先生!!」

「任せときなさい!!」

唯の言葉にさわ子はスイッチが入ってしまった。

「だからまだはやいつつの……………」

律は呆れていた。

「あつ、唯先輩、頬にケーキのクリームが……………」

「えっ？ついでる？ならあずにゃん拭いて〜〜」

唯は笑顔を出して梓に拭いてもらおうとする。

「自分で拭いてくださいよ・・・全くもう・・・」

梓は結局なんだかったいつて仕方なくポケットティッシュで唯の頬についているケーキのクリームをふき取った。

「ありがと、あずにゃん!」

「今回ですよ・・・」

「ええ〜」

梓は頭の中で本当に天然だな〜と相手が先輩なのに失礼なことを考えていた。

「よし、お茶もここまでにして学祭もあるんだし練習しますか!」

「お——!」

「はい!」

律が言った言葉に唯と梓が返事した。

漑と紬は笑顔でうなづいた。

そして唯と梓と漑はそれぞれのギター、ベースをケースの中から取出しいつもの立ち位置に待機した。

「よし準備いいか!？」

軽音部の部長、律がそついう。

「いいですよ、弦の音もばっちりです」

「こっちもだ」

「早くひこーよ」

梓と零は弾く前に音がおかしくなっていないか調整したが唯はまったくしてなかった。

「よし、ワン、ツー、スリー!」

律は大きな掛け声とともにドラムを叩くスティック同士をぶつけて合図を出した。

そして5人の楽器が音を奏でる。

ギター、ベース、ドラム、キーボード、4つの楽器が鳴らす音の旋律が絡み合い、ひとつの曲を作り上げていった。

そして演奏が終了した。

「ま、上々だな」

「ああ、だが学祭に向けてしっかりと計画しなきゃな。あつという

間に日にちはたつしな．．」

律と漑がそついう。

「よっしゃ！ やっぱり、今年のは派手にするためにとびっきりの露出の多い衣装を！」

「『それはいらないです先生．．』」

律、漑、梓の声が綺麗にそろった。

綺麗にそろったせいか、さわ子が一撃でノックアウトした。

「はあゝゝ疲れたゝゝ」

唯は長椅子に座ってグニヤングニヤンになっていた。

「まだ一回しか演奏してないじゃないですか！？ もう疲れたんですか？」

梓は大きな声で唯に叱咤した。

「いいじゃん、あずにゃん。動けば疲れるものなんだよ．．」

「カロリー消費しなきゃ太りますよ．．」

「え？ だって私太らない体質だもん」

「」「だからそれくらいやましすぎる……!」「」

漣、紬、さわ子の声が音楽室に響いた。

「だったらもっと練習してカロリー消費しましょうよ……!」

梓はここぞとばかりに練習するという前提で、練習という言葉を出した。

「よし、もう一回やるか。唯、やるぞ……」

律が長椅子に寄りかかっている唯を立ち上げらせてもう一回演奏させようとする。

「うい……す……」

そして再び、演奏が開始された。

今日はいつものおおよそ2倍?練習した。

といっても普段の練習量が少ないから、2倍となってもそんなに練習量が増えないのだが。

そして軽音部の部活を終えて帰り道――

「じゃあ……ね」

「また明日な〜」

5人はそれぞれ帰るべき場所へと帰って行った。

そして平沢家では――

「ただいま〜」

唯が家に帰ってきた。その直後、その帰りを待っていた一つ下の妹が姿を現す。

「お姉ちゃん、お帰り〜。部活お疲れ様〜」

エプロン姿の唯の妹、憂がでてきた。

ちなみに両親は残業出勤でいなかった。普段から仕事だり、両親だけで海外旅行いたりしていたため親は家をあけていることが多い。

「ふう〜疲れた」

唯は部屋にいつて私服に着替え、ギターを持ってきてリビングに来た。

「憂〜、今日の晩御飯はなに？」

唯はギターを弾きながら言う。

「今日はハンバーグだよ」

「やった！」

唯はギターをハイテンションで弾いた。

（ハンバーグっていった瞬間ギターの曲調変わった！？）

憂は唯のギターの曲調が変わったためツッコミをいれてしまった。

「今年はお姉ちゃんの学園祭のライブ見れるから楽しみだな〜」

憂がそう言った。

「楽しみにしててよ、絶対盛り上がるから！」

「うん！」

憂は姉がステージの上で皆と演奏し、歌う姿を楽しみにしていた。

だが今年の学祭のライブでステージで歌う姿は、それは楽しいという所ではないのかもしれない。

学祭は11月後半。

運命が音を立てずゆっくりと近付いていた。

#3 突き刺さる言葉

「ううう」

唯が机で悶絶している。

場所は私立桜ヶ丘女子高等学校。

月は9月。夏の暑さのピークを超えて秋の季節を向かえようとしていた。

「なんで朝なのに暑いのに！！」

唯は机に向かって倒れていたが顔だけ起き上がらせてそういう。

「確かに今日は暑いよな」

律は額から流れる一筋の汗をハンカチで拭き取る。

「残暑だね・・・」

紬も暑そうに言う。

「ああ～～もう冬早く来てよ！ううう」

唯は机を何の目的があるのかわからないが苦し紛れにたたく。

「とか言いながら冬になると、夏来い〜とかっていうんだろ？」

律は笑いながらそう言った。

「だったら秋だよりっちゃん！秋は食欲の秋だよ！！」

「お前はそれにしか頭がないのか・・・」

律は苦笑いしていた。

「秋は学祭だね。昨年度はまあ澪ちゃんがちょっと・・・。今年はきつと大丈夫だよ！」

紬は学祭って言った瞬間、脳裏に一年前に起きた彼女の不慮の事故の思い出が通り過ぎた。

「今年もまた澪がやらかすか？」

律は含み笑いを持った顔で言った。

「ヘックシュ！」

「どうしたの澪、いきなりくしゃみして・・・」

「なんか突然・・・」

和が澪の突然のくしゃみに苦笑いする。

「風邪でもひいた？」

「いや、それはないと思うよ」

「律たちがもしかしたら私の事、言っていたりして・・・」

「ありえるわね、それ・・・」

キンコーンカーンコーン

と、校内中にチャイムが鳴り響いた。

「おっと休憩時間は終わりだな」

「ううううこんな暑さじゃ授業に集中できないよ・・・」

唯は再び悶絶する。

「元から授業に集中してないだろ・・・」

「そういつりっちゃんもじゃん・・・」

「うっ・・・」

律も唯と同じで授業に集中できず気が散っていたのだ。

「とりあえず、暑さに負けずがんばりましょ」

紬は一筋の汗をぬぐいながらそう言った。

そしてそれぞれが椅子に着席して授業を受けていった。

今日の授業態度の一通り。

唯はもちろん爆睡、律は気が散って集中できず、紬、漣、和はもちろん集中して参加した。

そして昼の時間ー！。

「やつとお昼ご飯だぁー！」

唯はこの時間を待ち望んでいたかのように手を両手にあげた。

「てか、唯は授業中全部爆睡だろ……。ばれないのが凄いぜ……」

唯は一番、左後ろの席だったため、ばれることがなかった。

「これもすべて、私の実力です！！」

唯は胸をどんとたたき偉そうにする。

「いばるとこじゃねーだろっ！」

律は大声で唯にツツコミを入れた。

「んじやいただきまーす」

唯がそういい、弁当のふたを開けて箸を片手に取り、憂が作ってく

れた弁当の中にある卵焼きを箸でつまみ、口の中へと運ぶ。

「おいしい〜」

唯が笑みをこぼす。

「憂ちゃんが作ってくれた弁当おいしそうだな〜」

唯の机で一緒に食べている律がさういう。

「りっちゃん食べてみる？おいしいよ〜、憂が作ってくれた卵焼き」

「いいのか！？じゃあお言葉にあまえて〜」

律はそういい、自分の箸で自分の口へと卵焼きを運んだ。

「う、うまい！」

「でしょ〜」

「も、私死んでもいいかも・・・」

「りっちゃん、まだ行くの早いよ！〜」

律の行動に唯がツツコミを入れた。

そのやり取りを見ていた紬は笑いをこぼした。

「本当に唯ちゃんは憂ちゃんのお弁当が好きなのね」

「だって憂の作ったお弁当はおいしいんだもん」

「姉妹仲良くてうらやましいわね。私は一人っ子だから姉妹というのがよく分らないんだよね・・・」

紬は姉妹というのがいないため葛藤があった。

「むぎの弁当はいつもたくさんだよな？」

「ええ、たくさん力使うからね」

（何にだよ・・・）

律は紬が何に力を使うのかに疑問を持っていた。

20分後――

「おいしかった」

「ご馳走様でした」

「さ、あとは午後の授業だけね。放課後はみんなでお茶しましょ」

紬は教室の時計を見ながらそう言う。

「そうだね」

「そうだな」

そして昼食を終えた三人はそれぞれの席に座っていった。

再び午後の授業をつける。

だが午後の授業というのは非常に眠くなる。昼食を食べた後は誰もが一回は睡魔というのに襲われただろう。そして今、ここにいる彼女、平沢唯は睡魔という欲求に襲われて夢の世界に旅立ってしまった。

「まゝた寝てるわあいつ・・・」

律は唯の姿を一瞬だけ見て授業に再び参加する。

「もったべられない・・・」

と唯は呑気な寝言を言いながら午後もずっと寝ていた。

（マジで呑気すぎる・・・）

律は唯の姿に啞然としていた。

そして放課後――

「よしお茶しよー！りっちゃん！むぎちゃん！」

「なんでお前は放課後になると活性化するんだよっ！！」

律は唯の活発な姿に一発軽くたたいた。

「私はこのためだけに生きているのです！！」

「もっとマシな生き方をしろよ・・・」

律はとうとう呆れてしまった。

「じ、じゃあ行きましようか」

紬と律と唯は教室の掃除当番だったため少し遅れて部室にいった。

三階行きの階段を上り、そして軽音部の部室のドアノブを握りそして入口の戸をあけて中へ入る三人。

軽音部が活動している部室の中には同じ軽音部の部員、秋山澪と中野梓がいた。

それぞれ愛用しているギター、ベースを出していて、どうやら唯達
が来るまで練習していたらしい。

この二人は軽音部の中ではかなり真面目であつたためこの二人だからこそ、唯達が来るまで練習が出来たのだろう。

唯や律の場合なら、「お茶してから練習するよ〜」とか「お茶が先だ!!」となつただろう。

「あ、唯先輩達遅かつたですね。もしかして掃除当番でしたか？」

梓が敬語を使いながらそういう。

「そうだよ〜あずにゃん。よく分かつたね〜」

唯がそういう毎度恒例、梓に抱き着いてくる。

「もう！すぐに抱き着いてこないでください!!」

梓が唯の抱擁から回避した。

「あずにゃんのいけず・・・」

唯は淋しそうにいう。

「もう唯先輩は・・・」

「いいじゃん別に・・・」

「さ、さてお茶にしますか」

紬はそういい、お茶をするため準備をする。

紬がお茶の準備をしている間、漑が突然、話題を持ちかけてくる。

「そつえば唯に律、そろそろ定期考査があるの知ってるか？」

「で、で、定期考査！？」

「声が綺麗にそろいましたね・・・」

梓が静かな声で言った。

「やっぱり知らなかったか・・・。来週から定期考査一週間前で考査週間だぞ。勉強は大丈夫か？」

漑は二人の事を心配していたため定期考査の話をもちかけてきた。

「だ、大丈夫だ、よ・・・。まだ一週間以上あるし」

唯は冷や汗を流しながらそう言った。

「昨年みたいにひどい点数を取るなよ」

「うつ！？わ、分かってます！」

唯は背筋をまっすぐにして言った。

「律もだぞ」

「わ、わたしも！？」

「先輩方頑張ってくださいね」

梓は励ましの言葉を送った。

「さあお茶の準備ができたよ。今日はようかんよ」

「わぁ〜おいしそう〜。いただきます」

唯たちは和菓子のようなを食べた。

「おいしい〜〜」

唯はおいしいものの全般が好きなため、非常においしそうに食べていた。

「どうする？唯と律は今から少しずつ考査勉強するか？」

「いやぁ〜まだまだ一週間以上あるからいいよ」

唯は軽かった。自分の位置的状況がやばいというのに。

「でも、今回の定期考査の範囲は異常なほど広いぞ？大丈夫なんだな？」

「大丈夫だつて。澪は心配性だな〜」

律はそう言った、けど面倒見のいい澪は二人の事が気になって仕方がなかった。

「まあ本人たちもそう言っているから大丈夫じゃないんじゃないんですか？後で後悔するのは自分なんですし」

「「うつー!!」」

梓の発した後悔という言葉が唯と律の胸に深く突き刺さる。

（もしかして強すぎたかな？）

梓はまさか二人の反応がこんなにも大きいなんて思っていなかった。

「じ、じゃあ少しずつ勉強していきま・・・す・・・」

「私も・・・」

唯と律はそう言った。よほど、ダメージが大きかったのか手が震えていた。

考查は二週間後。彼女たちはどれくらい頑張れるのかー！。

唯はギターという誘惑が最大の敵であった。

#4 放課後勉強会！

季節は秋。街道沿い木々の葉の色が紅葉色に綺麗に色付き、秋が来たという雰囲気醸し出させる。

夏の季節とは違い、夕方に鳴いている蝉の声も聞こえなくなり、気温も下がって風も涼しくなり体が火照っている時に一層、涼しく感じさせる。

そうそれが秋。季節が変わることに人は少しずつ成長していく。

ここにいる彼女、平沢唯も外見だけでははっきりしないが中身は少しずつ成長していたのだ。

日が立てば学校行事もある。体育祭、学園祭などがある。その中でも最も生徒達が嫌な定期考査という苦痛がある。

そして彼女達は定期考査という最高最大の嫌な行事に立ちほだかれていた。

定期考査の前には考査週間という勉強できる時間が設けられている。

そう、私立桜ヶ丘女子高等学校は定期考査一週間前であり、考査週間だったのだ。

その為、部活は一次休止。勉強に専念する期間となる。

ここに五人の少女が一週間後の考査に備える為に勉強していた。

時は午後、授業は終わり放課後の時間となる。

彼女達は事前に桜ヶ丘女子高等学校の彼女達の活動する部屋、音楽室で各自、考査勉強に取り組んでいたのであった。

「さて、勉強するぞ〜」

しっかり者で真面目者、綺麗な黒い長髪をした漑がそう言った。

音楽室の机の上にはノートが五冊。

それぞれ一人一人が使っているノートだった。

やはり五人のノートを比べているとノートの中身と密度が違って見えた。

唯と律は、ノートの密度が比較的薄い。黒板や教科書などの重要部分を書いていないのがしつかりと現れている。

漑と紬と梓はノートの密度が厚かった。唯と律のようなノートではなかった。定規や油性ペンなどで重要部分を目立つようにしていたり、何よりのノートの字の位置どりが綺麗で非常に見やすかった。

「さてまずは古文からやるぞ」

漑は成績優秀なので先陣をきり、梓を除く他の三人を勉強の空気へと誘い込んだ。

梓は漑達とは違い、一つ下の学年の為、勉強する項目も違った。

「え〜、お茶してから勉強しようぜ〜」

律がそう言った。

「ダメだ律。先に勉強してからだ」

「そうだよ、りっちゃん」

予想外に唯までもがそう言った。

その言葉に唯以外の四人が目を丸くして驚いた。

「なっ！？唯がそういうとは！？でも、その割には筆箱出してねーな・・・」

律は最初、驚いた表情だったが唯の勉強の充分じゃない不準備に苦笑いした。

「まあ、でもやる気はあるってことだよな」

「唯ちゃん、勉強終わったらお茶にしましょうね」

澪は唯のある程度は勉強に対するやる気に関心を持ち、紬は更にやる気を出させる為に、軽音部がいつもしているお茶を持ち掛けてきた。

直後、光の速さで唯がバックの中から筆箱を取り出した。

「……速い……」

そのやる気をもっと別な物に生かすべきではないのか・・・と四人は同じ考えを抱く。

「さ、やるぞ。まずは考查範囲の教科書の120Pを開いてくれ」

こうして軽音部による放課後勉強会が始まった。

「ここがよく理解出来ないんだよね・・・」

紬は自分の理解出来ない部分を隣の漑に話し掛けてきた。

「ああ、これは・・・」

漑が簡単に説明する。

「ありがと、漑ちゃん！簡単な説明で理解しやすかったわ」

「え、そうか・・・」

漑は紬からの感謝の言葉を貰い、顔を赤面する。

「漑の奴、照れてるぞ——！！」

律は顔を赤くする漑を茶化す。

「お前は集中して勉強しろ！！」

漑の叫び声が音楽室に炸裂する。律は気が散っていたため集中出来ていなかった。

「あゝもうダメ、古文分かんないよ・・・」

唯は右手のシャープペンを離し、机に腕を乗せて、頭を乗せた。

「お前のやる気はどこに行ったー！！！」

「えゝ、あつちに行った・・・」

唯は何故か梓に向かって指を差す。

「わ、私・・・？」

梓は唯の指差した理由が理解できなかった。後で彼女は悲劇に会う。

「指差さなくてもいい！！しかもなんで梓なんだ！！？」

流石は天然の平沢唯。言うことに対して他人とのレベルが違った。

それに対し、澪は唯の発した言葉に的確にツツコミを大声で入れた。
「えゝだって・・・」

唯はそういいながら梓の近くに神速の速さで移動し、椅子に座っている梓に抱き着いた。

「あずにゃん、暖かくて気持ちいいんだもんゝゝゝ」

唯が梓に抱き着く。ムギユゝって音が聞こえる。

「なんで私にやる気が行くんですか！？勉強にやる気が行ってたんじゃないんですか！？」

梓は唯からの強制的な抱擁から離れる為に、苦し紛れの言葉を上げた。

「だってあずにゃんに抱き着くとなんかいいんだもん・・・」

唯のハッキリとしない返答に梓は爆弾発言投下しようとした。

「そんな調子で今後も勉強しなく、定期考査でも不十分な点数ばかりとって最終的には留年してしまいますよ!!」

「うつ!!!!」

唯の胸に『留年』という最悪の言葉がまるで槍にでも刺されたかのように深く突き刺さる。

（これで少しは効果あるかな？）

梓は唯からの抱擁がどんどん軽くなっていくのに少しは効果に期待した。

「あゝでも留年したら留年したであずにゃんと一緒に馴れるから、それはそれでいいかも」

唯は本当に気軽だ。唯が発したあまりにも気軽過ぎる言葉に他の四人は呆れてしまって言葉もでない。

「嘘だよ、あずにゃん。流石に留年はしたくないから、私、勉強するよ」

「唯先輩・・・」

そついい唯は自分の椅子に着席して勉強に取り組み始めた。

唯が集中して、右手にシャープペンシルを持ち、問題を解いていく。分からない問題は、紬からヒントを貰い、解答していった。

「唯の集中力は本当に凄いよな」

漑は集中している唯に対して聞こえないように梓と紬に話した。

「ああ、あの集中力を常に出せればいいんだけどな・・・」

「私はあの集中力を常に部活にも出して欲しいですよ・・・」

漑の言葉に梓と律はそれぞれの返答をする。などと、なんだかんだいって船員が勉強に集中していった。

梓は隣には成績優秀の漑がいるため、勉強中にわからない部分があったりしたら聞いてみていた。

それを見ていた律は「なんで私に質問しないんだ！」とか言ったりしていた。

それを聞いた梓は、目をそらしながら「勉強の邪魔になると思っている」と言い訳をした。

そつ、言葉に出さずとも梓の心境は分かり易いだろう。思ったことを口に出してしまう癖がたまにあるため。きっと梓は「律先輩だと聞いてもわからないと思うし、頭がいい漑先輩に聞いてみるのが得策かも」と梓は心の中でそう思っていたのである。

その言葉を聞いてしまった律は梓の首を軽く締めていたのであった。

その行動を見て律の頭に漑の制裁が落とされたというのは言うまでもない。律が何かしたら漑の制裁が振り下ろされる。これは二人の十八番だった。

「そろそろいい時間だし、お茶にしない？」

紬が勉強の均衡を崩してお茶の時間にさせようとした。

「「いいね！それ！」」

と、律と唯が待ち望んでいたかのような歡喜の声を響かせた。

「まあ、唯も律も真面目に取り組んでいたし、これぐらいにするか」

漑も納得の表情。梓も軽い休みと受け入れていた。

そしていつもの軽音部の放課後にやるお茶の時間があつというまに過ぎて行つた。

綺麗なカップに注がれたお茶を飲み終わった瞬間、唯や律は「後は家に風呂入って、飯食って寝るだけだー」とか「憂の晩御飯をたくさん食べて、後は風呂入って寝るだね・・・」と力尽きていた。

それを聞いた漑と梓は「家でも勉強しないのかー！！」とか「家で勉強しないんですか！？」という発言が音楽室に響いた。

そのやり取りを見ていて顔に笑顔をこぼす。

彼女、秋山澪は心配だった。帰り道でもずっと。帰り道で律と唯が笑顔で話しているが、彼女らが本当に勉強するか心配で仕方がなかった。

#5 負けない意志

時は夜の22時。気温も下がって大分いい気温になっているはずだ。この時間帯は学生たちにとって勉強しやすい環境だろう。

「よーしやーるぞー」

桜ヶ丘町のとある家の平沢家にいる一人の茶色い短く髪を揃えた天然の少女、私服姿の平沢唯が自分の部屋の中で右手を挙げて気合を込めた。

後、何日かで定期考査だ。そのために軽音部の後輩、中野梓から言われた言葉、「後悔」しないように勉強しようとしていたのだ。

だがいつものように勉強しようとしてもそれに対していつもの倍の強さで立ち塞がるのがあった。それは――

「なんでまた散らかっているかな・・・」

唯は部屋のテーブルや机の上に乗っかっている雑誌を手に取り、本棚へと、お菓子の袋などをゴミ箱へ捨てた。そして綺麗になった部屋の環境で唯は机に向かい、教科書、ノートを広げてシャープペンシル右手に勉強し始めた。

「えっと、これからやるかな・・・」

そして唯は勉強し始めていった。右手に持つシャープペンシルから少し出ている黒い針が唯の右手の動きに合わせ、カリカリとシャ

ーペンシルでノートを書く音が唯の部屋に小さく伝わる。その音が絶え間なく続いた。ということは問題を解答できている、つまり頭に入っているという事だろう。

「えっと、ここは・・・」

唯はシャープペンシルの芯を出させる部分を頭のこめかみにあてて考え始める。自分の記憶の断片を頭の中で拾い集めて、そして一つの答えを導き出す。

「確か、これだよな・・・」

そして再びシャープペンシルが動き始めていった。

「えっと、これは・・・」

再び、自分の理解できない問題の壁にたちはだかる。また自分の記憶の断片を拾い集めて答えを導き出すがー

「ううううわかんない・・・」

とあつという間に机の上で悶絶してしまった。机の上に自分の顔を載せている唯は右を向いた瞬間、自分の大切な相棒、ギターの Gibson・レスポールが目映った。直後、唯はギターを弾きたいという欲求に襲われてしまう。唯は椅子から無意識に立ち上がり、そしてギターへと手を伸ばした瞬間、ハッと我に帰った。

「いけない！ちゃんとやると決めたんだからやらなくちゃ！」

と唯は両手で自分の両頬を叩き椅子に座り、再び机に向かった。わからなかったら携帯のメールで澪や紬からヒントをもらい少しずつ頭に入れていった。

澪や紬は唯からの質問のメールを受け取り、ちゃんと勉強していると安心していた。

「え！？もうこんな時間かぁ・・・」

唯が集中して取り組んでいたため、気がついたら夜中の1時だった。ノートを見てみてもちゃんと問題文、解答、解答を導き出すための重要部分をしっかり書いていた。

「お風呂に入って寝なきゃ！明日は早く行って勉強しよう！」

唯は勉強道具を片付けて、それらをバツクの中へとしまい着替えを片手に風呂場へと向かった。自分の部屋からでて階段を伝い、一階へたどり着くと――

「お姉ちゃん、勉強お疲れ様」

唯の妹、憂が唯が階段を下りる音が聞こえてきたため台所から出てきた。どうやら明日のお弁当の下準備をしていたらしい。台所の上には弁当箱がでていて、明日の為に迅速に作りやすいようにしておかれていた。

「あつ、憂も考査勉強してたの？」

「うん！お姉ちゃんも頑張ってるみたいだね。それじゃ私、先に寝

るからね。お休み〜」

「お休み〜」

憂は就寝の挨拶をして、階段を上り、自分の部屋へと向かっていった。

「さて早く入ろつと・・・」

唯は明日の事も考えてせつせと風呂に入って鼻歌交じりに入浴をして、全身とそして女性にとっては大切な髪を丁寧に洗い、体のごみを落としていった。そして唯が風呂場から上がった。

「ふうい〜」

風呂場から出た時にちょっと体が火照っているため、風呂場にある熱い空気から解放され、普通の空気が唯の頬に当たり、涼しい感覚を唯に与えた。

「涼しい〜えつと・・・バスタオル、バスタオルつと・・・」

右手でバスタオルを取り、全身についた水滴をバスタオルの生地が吸収していく。

全身の水滴をとって頭の髪の毛の水分もとった後、自分の下着とパジャマを取って着替え始めた。

そして着替え終わった後、唯はまだ水気と風呂に入ったせいで崩れている髪をドライヤーで整え始めていく。ガーとドライヤーが音を上げてドライヤーの排出口から熱風をだし、それを髪にあてて、

いつもの自分の髪型に整えていく。

自分のいつもの髪型にセットした後、脱衣所を出て、リビングを通り台所へと向かい、そこにある冷蔵庫に手を取り、そして冷蔵庫の戸を開く。直後、冷蔵庫の中の冷たい空気が唯の頬にあたり、涼しい感覚を唯にもたらした。

「えっと・・・」

唯は冷蔵庫の中を見てその中からジュースが入ったペットボトルを片手で取出し、その後食器棚からコップを取り出す。台所でペットボトルのキャップを開き、そのペットボトルの開かれた口から、コップに向かって注がれる。トクトクと小さな音を立てて注がれるオレンジジュース。

コップに注がれたオレンジジュースを唯は片手にとって、それを自分の口に運び、そして一気に飲んでしまう。

「ああ〜いいわあ〜」

などと、ちょっと変な言葉を言いながら唯はもう一回コップにオレンジジュースを注ぎ、そしてまた一気に飲んでしまった。

「さて寝るかな・・・」

唯はリビングの電気を消して、再び階段を上って自分の部屋へ向かった。そして戸を開き、相棒のギターとともにベットに寝て眠りの世界へ誘い込まれていたのであった。

ちなみに澪、紬、梓は唯と同じく勉強。だが彼女らは唯とは違い、

勉強の開始時間が早い。唯は22時からのに対して、三人は勉強の開始時間がかなり早いし、内容もしっかり厚かった。

そして軽音部の部長、田井中律は家に帰った瞬間、TV見るわ、遊ぶわで勉強をそんなにしていなかった。せいぜい1時間ぐらいしか勉強していなかった。その上、気が散っていたためノートの内容も薄い。

今のところ、律が勉強の量が少なかった。そんなこんなで、五人の一日が終わったのであった。

彼女たちはこれからもいつもの日々を過ごしていく。一緒に笑い、一緒にお茶し、一緒に演奏するという五人一緒の日々を――

6 自分の変革

明朝。東から太陽が地を、そして空を薄く照らしていく。木には鳥の鳴き声が微かだが聞こえてくる。今日も彼女たちの新たな一日が始まるうとしていた。

ジリリリリ！！と平沢家の唯の部屋にある、目覚まし時計が鳴り響いた。絶え間ない音が部屋のあらゆる方向に反射してまだ眠りの世界にたたずんでいる唯に不快な目覚ましの音が耳に叩き付けられ、強制的な覚醒が訪れていた。

「ううーん」

無意識に手が目ざまし時計のベルを止まらせるストップボタンに手が伸びる。体がまだ眠りたい。眠たいという欲求に完全に負けていた。そして目覚まし時計のベルを止めた瞬間、一瞬で眠りの世界へと誘われていく。

「うう・・・えっと・・・」

布団の隣にはギターの姿があった。どうやらまた添い寝をしたらしい。布団にかけられて寝ていた。そして今、やることを思い出し、眠たいという欲求を振り払う。

「そうだ！！やることあったんだ！」

勢いよく起き上がったその瞬間、自分の髪がボサボサになっていた。唯は若干寝相が悪かった。そんなことは気にせずリビングへと

向かい朝食を取りに始めた。

二階から唯が階段を下りてくる音に下で先に起きている妹が気づいた。

「あ、お姉ちゃん、おはよう。今日は早いんだね」

憂は台所で弁当の準備をしていたみたいだ。ちょうどよく、弁当を包みにいれていたところであった。

「憂、おはよう。今日はちょっと早く行くから少し早く起床したよ……」

と唯は右目をこすりながらリビングにある自分の椅子に向かった。

「まってて、すぐにトースト焼いて朝食準備するから」

「そんなに急がなくていいよ」

姉が早く起きてきて、朝食の準備をしてなかったためあせっている。せかす憂に唯は憂に制した。けど憂は姉の事を思って迅速に準備した。

そして、焼けたトーストが唯の目の前に現れた。唯は薄く焦げ目がついた熱をもっている焼けたトーストにいちごジャムを塗って食べ始めた。朝食の時間が終わった後、歯磨き、洗顔、髪調整、そして制服に着替えて、学校に持っていく勉強道具と最低必需品を所持して学校に向かった。

「いってきま〜す」

「気を付けてね〜」

唯が荷物を背負い先に家を出た。毎日向かうべき場所へと登校したのであった。

「早くいつて勉強しなきゃ・・・」

などと、小さな独り言を言いながら早足で行く。朝の優しい冷たい風が早歩きで歩いている唯の顔にあたる。気持ちいいなという感覚を唯に与えてくれた。家を出た瞬間、平沢家の隣のお婆ちゃんが家の前を掃除していて、唯と挨拶を交わしたのであった。

「やっとついた・・・」

早歩きで学校に登校していたため、若干時間が短くなったものの、疲労が若干のしかかっていた。

場所は桜ヶ丘高校2年2組の教室に到着した唯は、疲労で悶絶していた。額には小さな汗が浮き出していた。

「唯ちゃんおはよう。今日は来るのが早いんだね」

机の上で完全にグダっている唯の隣に、普段から早く登校している金色の長髪をした少女、琴吹紬が朝の挨拶と共に話しかけてきた。

「あ、むぎちゃん、おはよう〜。昨日、あまり勉強できなかったから、今日は早くきて勉強しよっかなって」

「偉いじゃない、朝勉強なんて。唯ちゃん、考查に向けて頑張って

るみたいね」

「えへへへ、そう?」

紬の唯を称賛した言葉に唯は後頭部に手を当ててデレはじめた。唯はにやけている顔を作っている。そんなにも信頼できる友達からもらった言葉が嬉しいのだろう。嬉しい思いがすぐ顔にでてしまった。

「そうよ。じゃ、お勉強するなら私もちよつと付き合っよ」

「ありがと、むぎちゃん」

唯は紬の優しさに笑顔で対応した。優しさに感謝しながら唯は勉強に取り組んでいく。

「じゃあここなだけどさよく分かんないんだよね」

「えっと。ここはね・・・」

こうして唯と紬の朝勉強が始まった。一方、その頃二人の少女は――。

「あれ?今日も唯は寝坊か?」

頭にヘアバンドを取り付けた栗色の短髪をした桜ヶ丘高校の制服を着た少女、田井中律が交差点沿いでそう言った。いつもならこの時間帯にちよどよく出会っはすなのに今日は出会わなかった。ということとは二人からしては寝坊という意識があつた。だが今日は唯は早く来ていたのだ。

「多分、そうかもな。いつもの事だ。先に行くか・・・」

長身で黒色の長髪をした少女、秋山澪がそう言った。この少女も桜ヶ丘高校の制服を着ていた。背中にはベースを収めているケースがあった。

「そうだな。このままじゃ拉致があかないからな」

律がそついい、学校へ向かったのであった。直後、彼女の目に衝撃的な光景がたたきつけられる。

「ういゝつす」

桜ヶ丘高等学校二年二組に律が入ってきた。ちなみに澪は二年一組だ。

「あ、りつちゃん、おはよ〜」

「りつちゃん、おはよ〜」

勉強していた唯と紬が律の声に気付き、朝の挨拶を交わした。その直後、律の思考が止まる。朝勉強している唯の姿。彼女がそんなことをするなんて論理的ありうるのだろうか、いやもしかしたらこれは夢だと思い躊躇する。そしてこれは幻想だと思い、律は頬をつねってみる。頬に走る確かな痛み。その直後、彼女は――。

「なんじゃこの光景はああああ！！！！」

と叫んでしまった。その直後、律にうるさいというクラスメイト

からの声をかけられたは言つまでもない。

「んで、唯は朝勉強の為に早く来たと」

「そうだよ〜」

気を取り直して律が唯にそう話した。

「でもね、やっぱり分からない所が多いんだ。前みたいに追試とか受けたくないし」

「あゝ私も追試は勘弁だな。私も少しぐらい勉強するかな・・・」

「りっちゃんも勉強したほうがいいよ〜」

「そうだな」

そんな感じで三人は勉強していった。そして授業の時間が始まる。

「もう食べれない・・・」

（授業に寝てたら意味がないだろっ！！）

などと律は唯の授業態度の様子が気になり見てみたら寝ている姿に心の中でツツコミをいれて啞然とする。

「まあ、唯も唯なりに頑張っているからいいか・・・」

呑気な時間と真面目な時間が流れていった。

#7 達成感と優越感

「それでは、はじめ！」

それぞれの教室で担当の先生の声が響く。それと同時に机の上にあげられている生徒達は問題用紙に目を通し、自分の確信できる解答を解答用紙に答えを書き込んでいく生徒たち。

クラス平均三十弱の人の右手、もしくは左手に所持しているシャープペンシルで解答用紙に解答を書いていく音が束となって大きく聞こえる。

そしてある者は消しゴムで修正したり、ある者はシャープペンシルの動きが止まっていたりする。人それぞれのレベルがあった。

そして軽音部に所属している五人も当然のこと、問題用紙に格闘している。一人はスムーズと解答していき、一人は頭の閃きを生かして解答し、一人は鉛筆投げてそのでた数字の番号を解答用紙に記入し、一人は完全ではないが、進行スペースがストップし、一人は余裕の表情で解答していた。

(うーん・・・分からない・・・)

自分の心の中で呻っている少女、平沢唯。この少女は今回の定期考査に充分というほどではないが彼女は彼女なりに勉強してきたはずだ。

現在、彼女は進行がストップして考えてる所だ。シャープペンシ

ルの柄を頭にコンコンと優しく当てて考えはじめ。これでもない、あれでもない、などと答えがどれが最も正しいかという取捨選択をしながら考えている。

（これだったかな・・・？）

半ば、自分の勘だが解答用紙に自分の答えを記入していく。唯のシャープペンシルがカリカリと音を再び立て始める。分からない所は唯と律が愛用しているテストで解答不可の時に使用する秘密兵器、六角鉛筆、通称、六角君五号が登場した。唯は五号で律は七号。あの人からは一から四までないのか？と言っていたがある人はない！と自信満々に発言していた。

唯は子供のように天真爛漫な人であるため、正当な解答が当たって欲しいという純粹な願望と共に六角君五号、通称、ただの六角鉛筆を投げる。唯の右手から鉛筆が机へと落とされる。鉛筆が机の上をカタカタという回転する音を立てながら回っていく。そして音が止まったとともに鉛筆の回転も同時に止まる。

「これか・・・」

などという小さな独り言を放ちながら解答用紙に書き込んでいく。そしてその後の教科も唯は自分なりの解答を書き込んでいく。

そして数教科の考査を終了した後、先生は生徒たちの解答用紙を答案させていた。その為に生徒達を学校から午前中で下校させる。そして放課後では、生徒達の間で、問題の話が出回っている。放課後のクラスではこの問題はこれとかこれという話が浮上していた。

その中にも唯と紬と律がテストの教科の解答の話をしていた。

「唯、問題できたか？」

律はもう自分がもう終わった・・。という表情とオーラを噴出しながら唯に問いかけてきた。おそらく律は勉強不足で十分に解答できなかったという雰囲気丸出しであった。

「上々だよ！分からない所は鉛筆で転がしてやったけど、基本の問題は大体解けたよ」

「唯ちゃん、勉強したかいあったね」

「いや～～～ありがとう」

唯は褒められると嬉しくて気持ちを抑えこめれないのかすぐに顔にでてしまう。唯は後ろ頭に手をあててとびっきりの笑顔をした。

「そ、そうか・・・」

などと律はそういいながら一歩、後ずさりする。後悔先たたず、今その言葉が律にのしかかっていた。

「でもね・・それでも分からない所があったんだ」

「大丈夫よ。唯ちゃんは勉強したんだからいい点数とれるはずよ」

紬は不安になっている唯を励ました。

「ありがとう、むぎちゃん」

「さて部室にいくか！」

「でも今日は早く下校するから急いで学校からでなきゃならないよ」

「ちょっと行くだけだよ！！」

紬の言った言葉に律がそう返答した。ちょっとだけならいいかな、という心境を抱いた紬。そう思いつつ三人はクラスの教室を出て三階の音楽室へと向かった。

三人は談笑しながら三回の音楽室へと向かっている同じ軽音部仲間の澪と合流し、再び三回へと目指す。

昨年からいる一緒の四人は音楽室の戸を開いて、部屋の中に入った。部屋の中には唯一の軽音部の後輩、梓の姿があった。長椅子には梓のバックが置かれており、自分の席に座っていた。

「あ、先輩方お疲れ様です」

「梓もお疲れ様」

梓は礼儀正しくお辞儀をする。それに対し澪は梓にも挨拶をかわした。何もいっていないのに五人は軽音部の活動拠点、音楽室へと集合していた。連絡もしていないのにまるで意思疎通でもしてるように素早く五人は揃った。だがここに来て今日も早く下校しなければならなかった。

「ちょっと練習していくか！！私、ドラムたたきたいんだ！」

律はそういい、他人の意見も聞かずにバックから二対のスティックを取り出して椅子に座る。

「私もギターを少し弾きたい・・・」

「私もです!!」

梓も唯もケースから愛用のギターを取出し、アンプにつなげて所定の位置についた。

「まあ少しだけならいいか・・・」

「そうね・・・」

三人の楽器を触りたいという気持ちに残りの二人も動かされた。少しの時間だが五人は演奏した。やはり全員揃うといい演奏になるという心境を持つ梓。後は練習意欲を高めてもらえばという気持ちをもってしたが演奏に集中していたためその思いはすぐに消えた。

「ふう・・・」

練習を終えた五人は一息ついた。と同時に額から垂れる汗を拭う。

「練習したほうがいいなこれは・・・」

澪は自分の愛用しているベースをそうみながら言った。

「よし!帰り道にどつかよっていか!」

「賛成——!!」

律が右手をあげながら大声でそういい、唯も律の言った言葉に大きな声で返答する。

「まあ、午後は暇だし行くか・・・」

「そうね」

「そうですね」

他の三人も律の意見に納得し、学校の帰り道に寄り道することになった。だが寄った場所はいつものファーストフード店。ある女性はまたここか！という苦情の声を出していた。それを提案した律は財布の中が若干逼迫していたらしいためであるからここになったらしい。

そんなこんなで五人は後の考查教科も無事乗り越えた。テスト返却、これは笑顔、悔しみ、萎えなどのたくさんの心境がとびかう時間だ。不安要素の唯は無事赤点を免れてほとんどの教科が半分以上で唯は笑みを広げていた。だが律は自分にとって痛い考查になってしまったらしい。悔しそうな表情を広げていた。

#8 平凡な一日

「「「お疲れ様〜〜〜！！」」」

何人かの歓喜の声が音楽室で鳴り響く。それは軽音部の仲間五人が音楽室でお茶をしているところだった。今回の定期考査でそれぞれが頑張った事によりそれぞれが祝杯をかわしていた。四つの机の上にはたくさんの高級なお菓子と高級感漂ういい香りがする紅茶。五人はそのいい匂いに紅茶が注がれているカップに手を思わず伸ばした。

「おいしそ〜」

唯は目を輝かせて自分の机の上にあるカップに手を伸ばす。そして手に瞬間、自分の顔に近づける。香りと共に暖かい湯気が立つ。そして唯は静かに上品に飲む。そしてその後は、高級なお菓子にも手を伸ばす。

「ていうか、定期考査終わった直後、付近の飲食店で似たようなことをやらなかったか？・・・」

澪は昨日の飲食店によった出来事を話した。それを聞いた律、唯はそれぞれの返答を言う。

「これとこれは別ですよん！」

「こっちがメインなんだよ澪ちゃん！」

それを聞いた漣と梓は苦笑い。二人の適当っぷりに呆れていた。だがおいしそうに食べている唯と律を見て漣と梓も食べてみたくなつたし、紬はまるで息子を見守る優しい母親の目で皆を見ている。それぞれがそれなりの成績を出していたため、練習というのに取りつかれていた漣だったが頑張ったからいいかという意識に切り替わってしまった。

すっかり気が付けば、完全に雰囲気飲まれていた梓と漣。はつと我に返り固唾を飲んで喉を鳴らす。

「そつえば、そろそろ九月も終わりなんだけど、新曲とかどうするの？作ってたりする？」

紬が最大の質問をしてくる。今の所、作成した曲が四曲ある。桜ヶ丘高校でのデビュー曲、ふわふわ時間。そして新歓ライブで歌った、カレーのちライス、私の恋はホッチキス、ふでペンボールペンだ。ちなみに曲のほとんどが漣が作詞で紬が作曲担当だった。

漣が歌の元となる歌詞とかを作り、紬がそれにあわせて自分たちらしい曲の味付けをしていく担当だった。元となっている漣は彼女独特の相当な尋常じゃない個性的な場面があるため、当初ふわふわ時間の歌詞を書いてきたときはある二人にかなり批判された。だがある人はそれを受け入れる。受け入れた彼女は天真爛漫な為もはや関係なかったのだろう。だが作者、漣は「こんな歌詞恥ずかしくて歌えないよー！！」などと嘆きの声を上げる。土壇場になれば自分でもこんな恥ずかしい曲を歌うのかっていう状況にちよくちよく陥っている。

だがそれを平気で歌う唯には羞恥心っていうのがないのだろう。ライブなどではほとんど緊張せず、メンバーカル兼MCを担当す

るが、トークがぐだぐだだったり歌詞や歌うこと自体を忘れるといったドジも見られた。そんな彼女に頼り切っている一面も一部見られる場面もある。

「うーん、今の所、四曲あるし今は作らなくていいよ。いい詞も思いつかないしさ」

「そう？わかった」

などと漑と紬はまだまだ先だが学園祭での自分達の一年での晴れ舞台での事について考えていた。だが実際の所は学園祭まであと、二か月弱。ここで新曲を作るというのは至難の技だろう。なのにわずか一年で四曲も作り上げたというのはすべて謎に包まれている。

「大丈夫だ・・・よ。今年こそ何事もなく成功させよう！」

唯は口の中にお菓子を頬張りながら喋っていた。それを見ていた四人は食べ終わってから喋ればいいのに・・・などの個人的意見を心の中で思いながら苦笑いする。

「そ、そう・・・だ・・・ね・・・」

突如、漑の顔が青ざめて暗くなる。彼女の周りには周りの空気とは何かが違う不幸のオーラが漂っていた。それを見た律と梓は一歩たじろぐ。梓は彼女の過去に何があったのかまだ知らなかった。

「漑！帰って来ーーーーーい！！！！」

だが漑は律の救いの声と手を無視し不幸のオーラを拡散しながら

不適な笑いを出してくる。そんなに不幸なオーラを噴出してたら側にいる自分も不幸になってしまう。そんな気がしていた幼なじみの律。

「「漣ちゃん!!」」

そんな不幸の負のオーラを噴出している漣に唯と紬の救いの声が出てきた。

「・・・・・・・・」

漣は白目をむいて呆然とする。どうやら意識が向こうの世界へ旅立ってしまったみたいだ。

「ありや・・・こうなると漣を叩き起こすのにめんどくさいんだよね・・・」

などと律は目の前の親友が気絶しているというのに気楽だった。どうやらこの様子だと漣が気絶するのは日常茶飯的な意識を持つているのだろう。とりあえず早く意識を復帰させようとした。

「漣～～起きろ～～!!」

律は少々強引だが、漣の肩を両手でガシつとつかんでゆさゆさと揺らす。揺らされたことにより漣の頭が揺れて刺激して意識を強制的に復帰させた。そして通常の目に戻る漣。

「あれ・・・私・・・」

「さっきまで気絶してたんだぞ漣・・・」

律は若干心配したようにいう。いくら澪が気絶するのが日常茶飯的出来事だったとしてもやはり心配だったようだ。

「ごめんね・・・私の事、心配かけて・・・」

澪は小さく頭を下げて謝る。

「大丈夫だよ！澪ちゃん！今年は私が歌うよ！」

「唯・・・」

そういえば昨年にも自分はボーカル担当が嫌で他人任せにしていた。その他人任せにしていた自分の姿が澪の脳裏に走る。このままではまた皆に迷惑をかけるだけ。自分が一歩踏み出さなきゃならないと思った澪。

「大丈夫だよ。今年は私もやるから・・・」

「澪・・・」

「「澪ちゃん・・・」」

「澪先輩・・・」

澪からの予想外の一言を聞いて感嘆とする他のメンバー。ここの一人の少女も一歩を踏み出そうとしていた。

#9 懐かしの再会

定期考査が終わってから数日が過ぎた。月は十月へと突入する。街道の道沿いにある木の葉も綺麗に色付き、本格的に秋だなと感じさせる。朝方、夕方の気温差も激しくなり、風邪も引いている人も出てくるころだろう。そして全国の高校では季節的に夏服から冬服へと切り替わる衣替えという季節がある。

冬服に切り替わった桜ヶ丘女子高等学校では再び彼女らの一日と懐かしの家族の一日が始まるうとしていた。

「はぁ、はぁ、はぁ！！」

一人の少女が背中に大きなものを背負って、廊下で足音を立てながら走る。途中で先生に走るなど言われたがそんな状況ではなかった。時間内に入れなければ今日の一日が始まるかそこで終わるかだったからだ。呼吸を荒くして走り続ける。そして大きな音を立てながら教室の戸を開けて突入した。

「はぁ、はぁ・・・間に合った」

その声の主はもちろん唯だった。息を荒くして両手を膝の上について酸素の補給に集中する。

「今日もギリギリか？唯。どうせギターの練習でもしてたんだろ？」

唯が教室に大胆に入ってきたことにより律は苦笑いしながら唯の元に来る。後ろにはクラスメイト、紬の姿もあった。二人は息を荒

らしている唯の乱れた髪に苦笑いして、そして朝の挨拶をして唯の髪セットに手伝いしに行く。

「もう・・・髪がボサボサだよ・・・」

「朝から走ってくるからだろ？」

「だって・・・」

と律は唯と短い会話をしながら自分の席へと向かう。ちなみに唯の席は窓側の一番最後列だ。唯が椅子の背もたれの部分に掴んで引き、そして椅子に左側から通って座った。

「まあ・・・いいじゃない」

相変わらず紬は比較的、楽観的だ。唯の髪がボサボサに乱れていても紬は準備がいい。バックの中からくしと手鏡を出して唯に手鏡を渡し、紬は唯の真後ろにたって唯の髪をとかし始めた。

髪をとめてあるピンを外し、綺麗にくしが髪をとかしていき、自分のいつものショートボブヘアに戻り始める。

「唯ちゃんの髪ってさらさらだね」

「え？ありがと〜」

唯は褒められたりするとその嬉しさが抑えられないのかすぐに顔に出てしまう。そんな褒められてデレている唯を見た律と紬は苦笑いしている。

「よし元の髪型に戻ったね。あとはヘアピンを付けて」

唯は手鏡で自分の綺麗になった髪型を見て納得する。紬は唯の右髪にヘアピンを止めてあげる。

「違うよ！ヘアピンはここじゃない！！」

「え？」

紬は唯がつけているヘアピンをちゃんとした唯視点ね規定の位置に止めたが本人は不満だったようだ。

「りっちゃん！手鏡持つてて！！」

「え！？あ、うん」

唯が律に手鏡を渡して自分で止めはじめた。

「えつとにこの二つのヘアピンは30度の角度に平行にとりつけなきゃならないの！！。後、自分の目と眉の間に取り付けなきゃならないの！！」

「設定細かいな！」

「これがないやダメなの！！分かる！！？」

「分かるかーーーー！！」

唯と律のやり取りに紬は見ていておもわず笑みをこぼしてしま

う。そんなこんなで今日も彼女たちの一日が始まる。

時は経過して放課後となる。いつも通り部室に行ってお茶して喋って稀に演奏して、グダグダになって今日の学校生活が終了した。学祭が近いというのに呆れる顔をしていた部員が約二名。そして五人は寄り道しながら家へ向かう。途中に分かれ道で細が駅へ、律と漑が別の道へ、唯と梓がそのまた別な方角へと歩いて行った。

「あずにゃん、学祭楽しみでしょ？」

「はい！先輩方と演奏できると思うとわくわくして！！」

「フフツ、あずにゃんったら元気いっぱいだね。去年は私も少し緊張したな」

「唯先輩でもですか？」

梓がでもという繋ぎ言葉を入れた。彼女からして恐らく彼女に羞恥心という、恥ずかしさが無いと思ってたのだろう。唯が緊張したという言葉聞いて梓は若干呆気を取られていた。

「でもね、演奏中は気にならないんだよ。演奏が楽しくてさ」

「分かります、その気持ち！」

などと唯と梓は帰り道を二人であるきながら意気揚々に話していた。そして二人はさらに別れてそれぞれの帰るべき場所へと帰る。そして唯は自宅へと向かう。

「ただいま〜〜！！」

唯が玄關の戸を開けて中に入ってくる。唯の声を聞いて妹の憂が出迎えに来た。

「お帰り、お姉ちゃん」

憂は姉の唯が帰ってきたことにより笑顔で姉の帰宅の挨拶をした。靴を脱ぐ唯の視界にどこかで見た二つの靴がある。この靴はと思い、記憶の断片と断片を繋ぎ合わせて、ひとつの真の記憶を導き出した。

「これってまさか!？」

「そのまさかだよ」

期待に目を爛々と輝かせる唯に憂は最高の笑顔で返した。そして唯は荷物を片手にリビングへと向かう。

「たっただいま〜!!」

「お姉ちゃん、帰ってきたよ!」

「「お帰り、唯!!」」

そう、その靴を履いている主は平沢姉妹の一五年間以上育ててきた久々家に帰ってきた両親の姿があった。普段、両親は仕事の都合やら、旅行やらで家を空けていることが多かった。唯は嬉しくて両親に向かっていった。もちろん妹の憂も。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6889v/>

けいおん！ 運命と奇跡の交錯

2011年10月8日15時13分発行